

絵葉書 沼津名所 黒瀬橋の絶景 (蘭契社)



絵葉書 沼津富士八景 黒瀬橋の富士 (蘭契社)



絵葉書 沼津名所 黒瀬橋 (村木商店)

絵葉書に見る旧黒瀬橋

旧黒瀬橋は、江戸時代から運行されていた大岡日吉と上香貫の黒瀬を結ぶ狩野川の渡しの位置に、明治14年(1881)に架けられた木橋を初めとする。架橋後も度々洪水により流出し、そのたびに復旧されてきた。

当初は有料の賃橋であったが、大正12年(1923)の楊原村と沼津町の合併、市制に移行する直前に、架橋免許人の市川亀次郎・高橋虎蔵から両町村に寄付され、橋賃は廃止された。

しかし、翌年の出水により落橋し、鉄線を張った渡船に戻った。流失した橋の部材は西浦村に漂着したという。その後復旧したと見られるが、昭和13年(1938)には豪雨で三園橋と共に流失、仮橋が架けられるが、翌々年にはその仮橋も流出した。再び渡船となり、翌年末に復旧した。

昭和20年(1945)7月の沼津空襲で焼失、22年に応

急架設により復興したが、その後も23年のアイオン台風で被害を受け、さらの翌24年のデラ台風で破損・復旧、昭和33年の狩野川台風で再び流失し、また仮橋となった。

現在の黒瀬橋は、昭和35年(1959)から災害復旧工事として着工、玉造神社の西側から浪人川の排出口の下流側に位置を移して、鉄筋コンクリート橋として建設されたもので、昭和37年10月1日に竣工式が行われた。その後の平成5年に、下流側に自転車・歩行者専用橋が架けられた。

絵葉書の写真に写されているのは、木橋の時のもので、明治から大正期のものが見られるが特定はできない。香貫側には管理用とみられる建物があり、橋の上流側には流木止めが設けられている。沼津三島間の電車や線路敷、松並木も写されている。

駿河湾の漁

森田 安男さんの漁話

我入道のイカ釣漁 その3

前々号で紹介したサッポロやビシを使った仕掛けでは、ツノ（イカツノとも）やテーラ（カケドとも）を2～4個程度しかつけれません。さらに効率を求めて使われるようになった仕掛けがレンケツ（連結）です。森田さんの親の世代でもレンケツという仕掛けが使われていましたが、森田さんが漁師になった昭和30年頃は、サッポロやビシが廃れつつあり、これから紹介するレンケツが既に主流のイカ釣具となっていました。

レンケツは、一本の釣糸に7～8本のツノをつけていく仕掛けになります。レンケツで使うツノはサッポロで使っていたツノとは少し異なり、森田さんの親の世代では、鉛で軸を作り、ツメと呼ぶ傘状に並べた針を結びつけたもので、ツノ自身が釣針と錘の役目を果たしています。ヤリイカ用のツノは細くて長く、マイカ（スルメイカ）用のツノは太くて短くなっています。レンケツのツノは糸を巻きつけることでイカが集まりやすくしています。巻きつける糸の色は、森田さんがいろいろな色の糸で試してみた結果、ヤリイカ用では白色、マイカ用ではピンク色がよくかかるとのことです。糸の巻きつけには、手で巻いていく人もいましたが、森田さんは柱時計を改造して自作した糸巻き機を使います。イカが釣れるかどうかは海の状況によって全く異なり、糸を巻かないツノの方が釣れる時もあるため、実際にレンケツの仕掛けを海に落としてみないとわかりません。様々な状況に応じるため、たくさんのイカ釣具を持参し、現場で臨機応変につけ変えていくことになります。

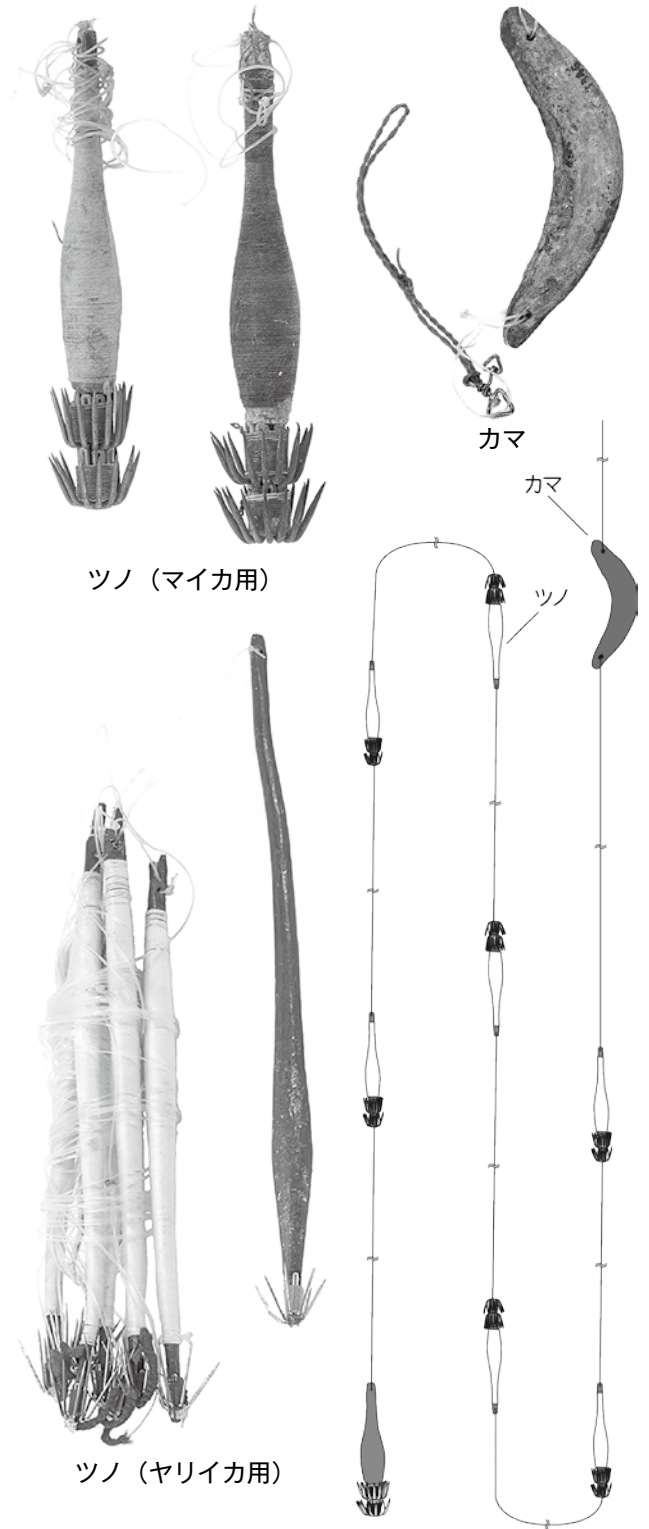
ツメの部分は、ヤリイカ用では1段でも逃げられることはないですが、マイカは2段にした方が逃げられにくくなります。しかし、後年には、ヤリイカ用も2段のツメをつけたツノが多くなっていきました。ヤリイカ用、マイカ用いずれのレンケツの仕掛けでも、一番下のツノは他に比べて大きく、また、糸を巻かないものをつけます。これは錘としての役割に重点がおかれているため、一番下を重くすることで、他のツノよりも沈み込みが早く、釣糸が一直線に海中に落ちていくため、中間のツノ同士で絡んでしまうことを防ぎます。この一番下のツノにもイカがかかることがあるためツメはつけておきます。

レンケツの仕掛けでは、釣糸を絶えず上下にゆすり、ツノを踊らせることでイカを惹きつけさせます。レンケツ最上部のツノの上に鉛をバナナ形に鑄造したカマというものを結びつけることで踊りが良くなり、イカ

が多く掛かるとされています。

昔の漁師は手が器用な人が多く、鉛で作られたツノもカマも鉛を溶かして自分で作る漁師が多くいました。そのため、使い物にならなくなった錘やツノなどの鉛の部分は捨てずに取っておき、自分の目的にあった釣具に作り直していました。

次号へ続く
（話：森田安男氏 昭和15年生まれ 沼津市我入道在住）



ツノ・カマともに
歴史民俗資料館所蔵

底につけるツノは
他のものよりも大きい

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

都市化が進む中、私たちは今何か大切なものを失いつつある。少し前なら古老から直接話を聞いたのに、検証すべきものがまだ多い。だが嘆くことなく「歴史の玉手箱」を紐解こう。全体の俯瞰もそこそこに、地域の「生活の舞台」、地形・地質や災害、集落の特徴や生業、さらにはランドマーク（陸標）や寺社、歴史や伝承、地名説話などにも触れよう。早速現地へ赴き、再発見が楽しみな「宝物探し」の旅に出よう。

①香貫・我入道編 その1 下香貫（島郷）

島郷を代表する砂礫州の地形発達は、水深5mより浅い海底地形を合わせて見ると理解しやすい。形態的特徴から、土砂供給は我入道方面で、沿岸流により島郷の南側に広がりを含め、志下を経て獅子浜側にもたらされている。あたかも牛臥山の「陸繋島」に対し、トンボロ（陸繋砂州）を形成した如くである。「島江」のようなラグーン（潟湖）の形成と、前面に沿岸州（砂州・砂礫州）が発達したのは約6000年前の縄文時代中期までで、高頂期以降の海退の時期に陸側が湖から沼沢地・湿地に変わっていった弥生・古墳時代頃、背後の砂礫地で人々の居住が拡大し、洪水や高潮の影響を受けつつも、安定化の道に向かったことが分かる。

●島郷の「御林」 中世に長さ590間、幅60間の地頭林として「香貫浜」の背後に成立した島郷の松林は面積11.7haを占める。元は下香貫の村林で延宝元年(1673)に幕府直轄の「御林」となった。下香貫の海浜で、文政11年(1828)の『御普請所 狩野川通絵図』では北側の浜水門、元禄期の「古湊水門」寄りに「潮除堤」が50間あり、さらに南へ100間の新土堤の普請を願っている。このように「島郷浜」では江戸時代後期においてすでに砂礫州が途切れ、土砂供給が弱まった牛臥海岸には高潮被害があったことが分かる。

「島郷浜」の北西、砂丘の御林の外に長さ75間、高さ4尺5寸、馬踏み5尺（両側に松の杭）の規模を持つ「田地の汐除・波除け土手」は、高潮の汐除、波浪除け土手として砂丘の高まりに今も残る。道路の開削で寸断されているが、北西側の砂丘の残丘部分では柿原共同墓地の横を走り、さらに北の塚田川側に延びていた。

南側の志下境から北西側の我入道境まで約1.1kmの砂礫州の浜は遠浅で、牛臥山の高島ノ鼻付近まで水深5m程の浅瀬が広がる。志下付近で250m、牛臥海岸付近では600m程の浅海部を有するが、沼津御用邸記念公園前の浜が大きく浸食されてしまったため、現在養浜事業が進んでいる。北側の浜水門にはその前面に新しく防潮水門が完成し、かつての牛臥海水浴場付近では高潮・津波災害防止の防潮堤工事が進捗している。

一方、陸地側に目を転じると、昭和45年6月から市

民憩いの場として整備が進められた15.6haの総合都市公園の内でも、黒松約7000本や広葉樹2000本余りがある防風林では、近年「松枯れ現象」が著しくなり、太い幹を誇った松も減少している。この島郷の砂礫州の広がりの中で、明治26年(1893)から造営された御用邸の内、西付属邸が建つ浜側と民家寄りに2列の砂丘が見られ、比高差3mから5m程の高まりが北西側に続く。この砂丘の凹地部分では風雨で根の部分が洗われた「根上り松」さえも倒木するに至っている。

●新田開発の地 島郷では高潮や強風を避けるように、砂丘背後の国道414号沿いに典型的な「路村」形態を取る家並みが続く。「島江」と古くに記した「島江新田」の開発対象地は不詳で、「島郷浜」の海浜側の御用邸付近に網干場・網小屋があったが、漁業に重きを置くことはなかった。明治の中頃から御林背後の砂質で排水性の良い土壌と温暖な気候を生かし、一時期は「桃郷」と表記したように、桃の栽培が本格的に行われた。この明治中期は農業が8割を占めたが、江戸時代は砂礫州背後の畑地開墾が中心だったのかは詳しくわからない。

新田開発の対象地は総称の「浜新田」が低湿地の南側、清水・汐入り・塚田・大久保の地籍にあり、砂礫州側の高まりと併せて「島江」の呼称で言ったのかも知れない。北西側の柿原・浜田の地籍も「浜新田」であり、周辺集落からの「出作」の時期を経て後に、島郷の浜寄りに定着したものと見られる。やがて北東部の「二ツ家」を始めとして、地引網漁や畑地耕作等で発展したと思われる。

集落の形成に関して見ると、江戸時代の安永年間以前は「島江村」と記され、その後「島郷」と改称している。北側の「新田」や南東側の「仲町」「久保」が成立し、やがて桃の栽培が盛んとなって、寛政・文化年間頃には「桃郷」と改称したという。すでに幕末頃、下香貫村の内に「桃郷村」の表記があり、枝村・枝郷の性格で成立している。今から300年程前の家数はわずかに35軒であったという。なお自治会組織としては明治27年(1894)塩湊地区から分離し、87戸で新たに「島郷区」として独立している。



柿原の砂丘部に残る「汐除・波除け土手」

沼津の別荘 三津の「漁楽荘」と田中平八①

内浦小海との境に近い内浦三津字小島、駒形神社の西南に「漁楽荘」という別荘がありました。現在は一般の住宅地となっています。

地元の金指貢さんからは「いとへい」の別荘で、相撲取りが来たこともあったとの話を伺いました。三津の故山本三朗さんの記憶では、普段は京都から来たという婦人とはあやの二人住まいであったとのことでした。若い頃に柚子の実を丸ごと使った料理を振るまってもらい、その美味しさや上品さに「流石に京都の人だ」と感激したと話されていました。

「いとへい」とは信州伊那の出身で、横浜に糸屋平八商店を開業し、生糸相場で巨額の利を得て、「天下の糸平」の異名を持つ田中平八（藤島釜吉）のことを指していると見られますが、「糸兵」や「田中平八」と呼ばれた人物は、確認できる場所では、初代から3代まで3人おり、その内の誰かに該当するのではないかと推定できますが、そう単純ではないようです。

初代は明治17年（1884）に熱海で亡くなっており、長男の2代平八（洋之助）は慶応2年（1866）生まれで明治16年（1883）家督相続・襲名、3代平八は初代の長女との婿の北村菊次郎（明治26年没）とするものが広く知られています。

また、3代目はなく、北村菊次郎は初代を引き継ぎ、志半ばで急逝したため、初代の長男の洋之助がその跡を継承し、2代を名乗ったとするものもあります。

昭和4年（1929）に岡部長景が三津久伏の東瀛荘を取得する以前、その土地と建物の所有者は、大正13年に経営破綻した高田商会の精算管理者です。この高田商会の創業者の高田慎蔵の後を大正8年（1918）に嗣いだのは長女雪子の婿である初代田中平八の3男釜吉で、同じ三津の東西の端に近親者の別荘があったこととなります。

また、西浦久連の興農学園の設立に深く係わる旧幕臣の子で沼津兵学校付属小学校に学んだ渡瀬寅次郎の次男である次郎（明治31年・1898年生まれ）は、田中平八の養子となっており、昭和4年（1929）に久連で開催された興農学園の開校式にも参列しています。2代の洋之助の長女花子の婿養子のように。興農学園の西浦久連への設置には縁者の別荘が内浦三津に存在していたことも関係しているのかもしれない。



「漁楽荘」の跡地の現状

資料館からのお知らせ

図書頒布のお知らせ

重要有形民俗文化財「沼津内浦・西浦及びその周辺の漁撈用具」報告書の頒布をしています。入手ご希望の方は当館までお問い合わせ下さい。

なお、頒布場所は、当館のみですので直接ご来館いただくか、現金書留（要送料）での申し込みとなります。頒布価格は、「一覧表」・「図集」・「概要1」の3冊で合計2000円です。分割も可能です。



企画展「地先の漁」の終了について

令和2年度の企画展「地先の漁」は5月9日をもって終了いたしました。国指定の漁撈用具の中から磯物採取漁・突漁・陥穽漁の道具を紹介しました。

新型コロナウイルス感染拡大の中で入館者が少なくなり残念ですが、新たな企画展の開催に向けて準備を進めています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2021.6.25 発行 Vol.46 No.1（通巻230号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp